
Paradise † End

千叫 青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Paradise † End

【Nコード】

N0801H

【作者名】

千叫 青

【あらすじ】

連続殺人犯少年Aに両親を殺された双子の兄妹、榎真と芹。二人の通う校内で起こる奇怪な連続自殺事件、薬物汚染、その捜査から導き出された答えが社会的事件を巻き起こす。「じゃあもし自分が同じ目に合ってもそう言い切れる？」あなたは？

吊

7月22日

黄昏が殺伐とした空気漂う教室を黄金色に染め上げていく。窓際から伸びる二つの影が一つに重なり合う。それは誰もいない教室の中、口づけを交わす生徒の影。ゆっくりと互いのぬくもりを遠ざけ、そして見つめ合う。

「もうすぐだね……」

「……あと三日……」

教室の中央、まるで二人を見下ろすかのように、背広に身を包んだ男がぶら下がっている。身動きひとつせずただ、力なく垂れ下がるその男の首にはロープが巻き付いている。

「三日で全てが終わる……」

A

7月23日

冷たい空気が頬を撫でる。朝の日差しに背を押され生徒たちの群れが気だるい足取りを引き摺るように進めていく。

校庭からは、部活動の朝練に勤しむ生徒たちのかけ声が校舎にこだましている。

まだ8時を回らない校内の廊下には、生徒の姿はなく、閑散とした空気が漂っている。それはさながら無響室のようで、一種の圧迫感すら感じさせる。そんな濁りなき空気を掻き乱すかのように、優等生風の女生徒が一人黙々と自分のクラスを目指して歩いていく。

2年4組。

教室の戸が女生徒の手によって開けられる。誰もいない教室に、校庭から響いてくる朝練のかけ声が、ガラスのオブライイトに包まれ微かに聴覚を刺激する。

教室の中央、無作為に垂れ下がる物体と化した塊に目を奪われる。

「・・・・・・・・」

乱雑なかけ声など瞬時に脳裏からかき消すほどの異様なその光景。一瞬の躊躇にも似た絶句とともに体が硬直する。だがすぐさまその意味を理解する。

「キャアアアアアー！！」

静寂を掻き散らす叫び声が校内にこだまする。

その声に駆け付けてきた生徒たちが、跪き震える女生徒の姿を捉える。震える彼女の指先にあるもの、

「!?!」

それはそのクラスの担任が首を吊ってぶら下がっている姿。

十

「自殺するような心当たりはまったくないと？」
事情聴取をする初老の刑事、吉田。よしだ

「ええ、はい……」

額の汗を幾度となく拭う校長。

校舎内には生徒たちの影は一つもない。

現場検証が行われている教室の中、若手の刑事、畑野はたのが威勢よく
駆け込んでくる。

「遺書が見つかりました！」

真っ白な封筒に入れられた「遺書」と思しきそれを取り出し広げ
見る吉田。真っ白なB5のコピー用紙にきれいに羅列された文字が
並ぶそれは、プリントアウトされたもの。

『先日亡くなった三村みむら、澤田さわだ、川嶋かわしまを事故に見せかけ殺したのは
私です。自分はその生徒たちから暴行を受けていました。耐えられ
ませんでした』

それを見つめる吉田に畑野が告げる。

「三人の生徒はいずれも自殺として処理されています」

「死因は？」

「三村は列車への飛び込み、澤田は学校屋上からの飛び降り、川嶋
も同様です」

「遺書は？」

「残されてはいましたが、いずれも同様にプリントアウトされたも

のです。機種はいずれも校内のパソコンルームのプリンターと同じもの、用紙もB5で校内で使用している銘柄と同じです。おそらく今回も同じかと・・・」

しばし考え込む吉田。

「鑑識に回せ」

十

体育館の時計の針が11時49分を指す。

集められていた生徒たちが下校させられていく。

「かなやま金山自殺したって」

「なんでー？」

「知らない」

「いいじゃん、清々する」

「キャハハハハ、だね！」

正門に溢れかえる同じ制服に身を固めた生徒たちの人波。他人事のセリフを吐き散らしながら下校していく。無責任な言葉の断片が手を取り雑音と化し低い唸りを上げる。みなそれぞれ勝手な憶測を会話にして帰路へとつく。その雑踏に身を潜めるように波に紛れ肩を並べ歩く二人の男女、榎真と芹。えま耳に届く無情な会話の切れ端が、二人の会話を交わす意思を削ぎ取り言葉を奪う。

県道に出る二人、辺りを覆い尽くしていた生徒たちの人波も散らばる。見渡す限り、行き交う車と赤の他人の目的の知らぬ行進のみが目に見えるのみ。

会話もなくただ俯き歩き続ける二人、どちらからともなくそつと手を差し伸べ握り合う。そのぬくもりの中に、掴めないものを必死で取り戻そうとしているかのごとく愛しげに、微かに動く指先で互

いの存在を認識し合う。

店を開け始めたばかりのひと気の少ない商店街を歩いていく二人、寂れた家電用品店の前を通り過ぎる。照り付ける日差しに、セピア色に色褪せたポスターから、忘れ去られたアイドルが満面の笑みをたたえている。その隣に置かれた液晶テレビからニュースが流れている。

感情のない、いつもと変わらぬ褪めた表情で、誰を見つめるわけでもなく淡々とキャスターは告げる。

『……事件の容疑者として拘束されておりました少年Aの身柄が警視庁に移されました』

画面いっぱいに移る容疑者を乗せた車。

二人握る手に力がこもる。二人も一方の手には携帯が握られている。メールを打ち続ける。

『知ってる？ 金山先生の自殺の原因……』

二人内容は同じもの。それを延々送信し続ける。

+

「ただいまー」

榎真と芹の帰宅に祖母が出迎える。

「あら、どうしたの？ 忘れ物？」

首を振る二人。

芹が答える。

「今日はもう終わり」

「えっ？」

「先生が死んじゃったから」

淡々と答える榎真。

眉をひそめる祖母の横をすり抜け真っ先に和室へと向かう。

仏壇の前に手を合わせる二人。

「ただいま」

「ただいま」

榎真の部屋の中。

二人寄り添いながらテレビゲームをしている。

戦闘服に身を包んだ敵キャラを撃ち殺すだけの単調なゲーム。

建物の影、車の陰から次々と現れる敵をただひたすらに撃ち殺すだけのゲーム。

机の上、写真立てに飾られている記念写真、海を背景に岬の上で撮影された写真の中、二人の両親が微笑みかけている。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

デジタルな叫び声、銃声の鳴り響く部屋の中、会話すら交わすことなくただ無心に打ち続けていく。

「・・・・クスリ、あといくつある？」

芹が口を開く。

「3つかな」

「ちようどだね」

頷きで答える榎真。

「お昼ご飯できたわよー」

下の階から祖母が声をかけてくる。

『ギヤアアアアアー！！』

メタリックな鮮血が画面を染め上げる。

「はーい」

「はーい」

ダイニング。

三人で食事を摂る。

「金山先生だっけ？ どうして亡くなられたの？」

「自殺」

「首吊り」

黙々とチャーハンを食べる榎真と芹、淡々と言葉を吐き出す。

「あら、だってこの前も同級生の子亡くならなかったっけ？」

「うん、バカ三人組ね」

「あいつらは死んで当然、苛めっ子だったから」

榎真の言葉に芹が相づちを加える。

「そんなこと言うもんじゃありませんよ、どんな子だったとしても悲しむ人はいるんですからね」

怪訝な面持ちで叱る祖母の言葉に、二人スプーンを握る手が止まる。

「誰？」

視線を落としたまま尋ねる榎真。

「えっ、」

「誰が悲しむの？」

さらに付け加える芹。二人の質問にたじろぎながらも

「たとえどんな子でも親御さんはいるでしょ」

答える祖母。

「僕たちにはいない」

「悲しんでくれる母さんも父さんも」

自分の発したセリフが、二人に与えた失望の意味を理解し言葉を

失う祖母。

会話を失った三人、無言の食卓にテレビはただ喋り続ける。ワイドショーが事件を取り上げている。にこやかに微笑む女司会者が、評論家の大西おおにしに意見を仰ぐ。

『少年Aの人権問題が頻繁に取り立たされておりますが、大西さんはどう思われますか？』

『私は一概に少年A一人の責任ではないと思うんです。彼は歪んだ社会が生み出した、いわば犠牲者の一人なのではないでしょうか』

テレビを睨み付ける榎真と芹。

『9人もの犠牲者が出てるんですよ、それでも少年法改正には反対だ？』

『ええもちろんです。だいたいまだ彼には……』

祖母がチャンネルを変える。ニュースが流れている。

『……さん22歳が自宅で遺体で発見されました。死後一ヶ月以上経過していると思われ、自殺した交際者の男性との関連を……』

+

榎真の部屋、電気は消されている。

ベッドの布団に二つの膨らみが背を向け合い寝転がっている。

「……………榎真？」

「ん？」

「……ムカつくね……」

「さっきの奴？」

「……うん」

二人向き合い見つめ合う。そしてしっかりと抱き合う。

「……ゆるせない……」

榎真の鋭い眼光が写真立ての両親に向けられる。

唆

細い路地を埋め尽くすように、パトカーの群れが古びたアパートの周りを取り囲んでいる。パトカーのランプが、深夜の町並みを赤く染め上げている。

錆付き所々穴の開いた手摺りに、今にも抜けそうな階段を上がった二階の一室に警官達が集まっている。

取り調べられているそこは、金山の使っていた部屋。

乱雑に放られたシワだらけの薄汚れた革靴に、泥だらけのスニーカーが転がる玄関を入ると、すぐに異様な臭いに嗅覚が支配される。鼻につくそれは、染み付いたタバコのヤニと生ゴミの臭いの入り混じった生活臭。一人暮らしの男の放つ独特な体臭を作る根源臭。首を横へと傾ければそこは小さな台所スペース。流しには洗われることを拒むかのようにギトギトの油污れを纏った鍋が無造作に放り込まれている。部屋中のいたる所に綿ぼこりが丸まり、人が通るたびにどこつくことなくフワフワと漂っている。

捜査用の白い手袋をはめた吉田と畑野が台所に立ち隣の六畳間を見つめる。手帳片手に吉田に告げる畑野。

「金山は38にして未婚、生徒ウケもあまり良くなく、むしろからかいの対象になっていたようです」

読み古された雑誌の転がる部屋、風俗誌も入り混じるそこから女の匂いを感じ取ることなどではしない。漂う澱んだ空気は、さええない中年男の虚しい日々を伝えてくる。

「で、殺された例の三人の生徒たちからは、影で暴行まで受けていたと……」

顔に刻まれた深いしわ、それをピクリとも動かすことなく語る吉田。

「はい。それから遺書のことなんですが、やはり全て同じ機種のプ

リンターから印刷されたものでした。用紙も同メーカーのものです」

ちやぶ台の上を調べていた鑑識の一人が、そこに置かれたノート型パソコンがスリープ状態になっていることに気付く。マウスを動かして起動させる。

「!？」

映った画面を見つめハツとする。

「吉田警部！」

その言葉に歩み寄りその画面を覗き込む吉田と畑野。

「!」

「こ、これは、」

モニターに映し出されたそれは

『三村、澤田、川嶋を殺してあげましょうか？もしその意思があればしたら黒板の端に黄色のチョークで「OK」と書いておいて下さい』

殺人代行を示唆するEメール。

愕然とする二人、言葉を失い見つめ合う。

薬

7月24日

制服に身を包んだ榎真と芹、家を出る。

「行ってきたーす」

「行ってきたーす」

二人手を繋ぐ。

俯いたまま、何を話すことも必要としない。ただ繋ぎ合う互いのぬくもりが心を繋ぐ。

「おっはよー!」

背後から声を掛けられる。振り返ることもしない二人の前に回り込むのはクラスメイトの女子。

「……おはよ」

ニヤつくクラスメイトに微笑み返す榎真。

さりげなく手を離す芹。

「仲いいよね」

ニヤニヤと好奇心剥き出しの女生徒に、そっぽを向き目すら合わせない芹。対して取り繕った笑みで軽く交わす榎真。

「聞いた? 聞いた? 金山の自殺の原因!」

女生徒の振ってきた話題に首を傾げる榎真。

「なんかね、3バカトリオ殺されたんだって! 自殺じゃなくて金山に殺されたんだってさァー!」

「うそーほんとにー」

「ほんとほんと、たぶん今頃すごいことになってると思うよ、学校!」

興奮気味の女生徒、それは他人事の極み。他人の不幸を喜ぶ満面

の笑みを浮かべている。

「ふーんたいへんだー」

同様の笑みを浮かべながらも褪め切った瞳の榎真。あくまで蚊帳の外の芹。

「おい！」

突如背後から声を掛けてくる男子生徒が一人

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、」

息を切らせ立ち尽くすのは、同級生の篠山^{しのやま}。血走った眼で女生徒を睨み付ける彼、その風貌はイカレた若者。肩までだらしく伸ばした髪は、まるで焦げたように斑な茶髪で、皮膚とゆう皮膚は泥でも塗りつけたかのように焼かれ、うっすらと髭まで伸ばしている。

「さ、先行ってるね、」

ただならぬ雰囲気を感じ、足早にその場を立ち去る女生徒。その後ろ姿が遠退くのを確認するのすらダルそうに息を切らす篠山が、待ちきれんとばかりに震える手を差し出す。

「あれだ、あれよこせ、」

「……苦しそうだね」

そんな彼を卑下するかのように微笑みかける芹。

「て、てめエ！」

胸倉に掴み掛かる篠山を鼻であざ笑い芹は告げる。

「あげたいのはやまやまなんだけどね、今持っていないんだよ」

「あ、ああ！？」

殴り掛からんばかりの勢いの剣幕で

「ど、どこだ！？どこにある！！」

掴み上げる拳に力を込める篠山。

「……学校に行けばあるよ」

それすらも楽しむかのようにニヤニヤと軽くかわす芹。

「ほ、ほんとだな！？」

頷きで返す芹に、途端に安堵の表情へと変わる篠山、その腕を離す。

「さっ、早く行きましょ」

震える腕を取り誘う榎真。

もはや一人で歩くこともままならない篠山を挟み、二人見つめ合
いほくそ笑む。

+

生徒たちが次々と登校してくる正門前、報道陣が陣取っている。
生徒たちに向かってマイクを向ける。

「ちょっといいかな？」

立ち止まる生徒たちに片っ端にインタビューしていくレポーター
達。

「金山先生ってどんな先生だったの？」

「ええ、なんか頼りないって感じ」

同様の質問合戦があちこちで繰り広げられている。

「キモイキモイキモイ、キモイ！」

「キャハハハ、言すぎ！キモイ！」

「ちょっと止めてください！警察呼びますよ！」

教師の一人が必死でそれを阻止しようとする。しかしそれすらも
インタビューの対象にしてしまうレポーター。

「あっ教員の方ですか？金山先生が自殺した生徒の事件に関与して
るって本当なんですか！？」

「なっ、なに言っ、」

+

朝礼のために並び始めた生徒たちがざわつく体育館。

校舎内から一人また一人と生徒たちの姿が消えていく。

誰もいなくなった教室、2年4組に芹と榎真と篠山が集う。

「は、早く、早くくれ、」

「はいはい、今あげますよ」

まるで子供をあやすように言う芹、机の中から風邪薬の瓶を取り出す。三つの白い丸い粒がカラカラと音を立て透き通った瓶の底に遊ぶ。

「ハァ、ハァ、」

震える手のひらを差し出してくる篠山。その上に全てを放る芹。それぞれ形の違う錠剤が転がる。

「い、いつもより、お、多いじゃねーか、か、形も違うし、」

朦朧とした意識の中、疑問を指摘する。

「いつもより効果が薄いのだよ」

「だから種類も違うし数も違う」

微笑む二人の言葉を鵜呑みにする篠山、その錠剤を水もなしに一気に飲み込む。

「ハァ、ハァ、ハァ、」

口にした安堵に呑み込まれ恍惚の表情に変わりゆくその姿を、褪めた眼差しで見つめる二人。

「さっ行きましょ」

「朝礼だよ」

静まり返った体育館内、壇上に上がる校長が額から流れ落ちる汗を拭いながら生徒たちに向かい演説する。

「金山先生は、生徒思いの、大変、素晴らしい教師でした」

俯いたままで、幾度となく言葉を詰まらせるその言葉に説得力はなく、聞かされている生徒たちも教員たちですらもシラけた表情で皆俯いている。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、」

2年の列に並ぶ篠山が青ざめ震え出す。キョロキョロとどこ

くところない視線を忙しく泳がす。明らかな挙動不審、取り囲む生徒たちが彼を避けるように列を乱し始める。波紋のように広がるざわめきに教員たちが気が付いた次の瞬間、突如倒れる篠山。

ざわめきがどよめきに変わる。

痙攣し泡を吹く彼のもとに駆け付ける教師が叫ぶ。

「おい！救急車だ！！救急車呼べ！！」

乱れ切った4組の列の中、無表情のまま立ち尽くしている榎真と芹、二人見つめ合い微かな笑みを浮かべる。

儀

捜査一課。

吉田が啞えタバコで調書を手に、捜査員数名と共にテレビを見つめている。

椅子に深々と腰掛け、片手には印刷された調書、『三村、澤田、川嶋を殺してあげましょうか？』『金山宅のパソコンに残されていたメッセージを持っている。』

テレビ画面に映るのは「北中学騒動」のワイドショー。
キャスターは語る。

『自殺を図ったと思われる教師の金山 浩ですが、先日続けて自殺した三人の生徒の殺害が疑われております』

その内容に捜査員一同舌打ち交じりに首を傾げ口を開く。

「昨日の今日だぞ、どうしてマスコミに洩れてんだよ！」

「生徒たちのインタビューからも同様の意見が出てましたね」

「マスコミが取り上げたのは今日の昼のワイドショーからだ、生徒たちがメディアから情報を得られたはずがない」

タバコを灰皿に押し付け、ため息混じりに煙を吐き出し指示を出す吉田。

「木田はマスコミ各社に確認取れ、佐藤は生徒たちに聞き込み、いいな」

「はい」

「了解」

そこに畑野が駆け込んでくる。

「吉田さん！思った通りでしたよ！」

調書を机に投げ置き畑野に目を向ける吉田。

「やっぱりただの事件じゃありませんよ。金山浩には完璧なアリバ

イがありました」

「なにー!」

身を起こす吉田。捜査員全員の視線が集まる。手帳を広げ畑野が続ける。

「ええ、一人目の生徒、三村が轢死した時間、金山は近所の飲み屋にいました。しかも二人目の澤田、この時は同僚の教師と校内で残務処理をしていたそうです。アリバイは完璧です」

「それじゃ金山は……」

「そうです、殺害された可能性が……彼も犠牲者かもしれませ
ん」

皆言葉を飲み込んだ次の瞬間、電話が鳴り響く。即座に受話器を取
る吉田。

「……はい……本当ですか!? 分かりました、すぐ向かいま
す!」

電話を切り立ち上がる。

「北中の生徒が倒れた、行くぞ!」

「えっ?」

「薬物反応が出たそうだ」

戯

生徒たちが次々と帰路についていく。

彼等にインタビューを試みる各社報道陣。

「・・・・・・・・」

何も言わず拒む者。

「ぷぷっ、ウケる・・・死んで当然!」

「殺されて当然、キャハ、」

受ける者。

それぞれが、非現実的な非日常を楽しんでいる。隠し切れぬ他人事の表情がファインダーに収められていく。流れ作業のごとく続けられる臨海戦術のインタビュー合戦。その中、レポーターの一人が手を繋ぎ歩く二人組みに歩み寄りマイクを向ける。

「ちよっとお話聞かせてもらってもいいかな?」

立ち止まる二人。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言のままじっとレポーターを見上げる二人に少したじろぎながらも

「金山先生が、亡くなった三人の生徒から暴行を受けてたって本当なのかな?」

定例の質問を投げ掛けるのは、新人キャスター橋田愛子。はしだあいこ彼女を見て二人見つめ合い俯く。そしてほくそ笑み呟く。

「・・・・・・・・橋田」

「・・・・・・・・愛子」

握る手に力がこもる二人。

「あっ、嬉しいなあー。名前覚えててくれてるんだあー」

名前を出され素直に喜ぶ橋田、調子付いて質問を続ける。

「二人は金山先生と亡くなった子たちとは親しかっ・・・」

「いいこと教えてあげる」

それを遮る女生徒、榎真。

「えっ、なーに？」

思わぬ進言に瞳を輝かせる橋田に、悪戯な笑みを向け

「でも交換条件がある」

告げる男生徒、芹。

告

看護婦達が忙しく歩き回る病院内。

フロアーに設置されたテレビからニュースが流れている。

『・・・屋上で刺殺体で発見された男子生徒は自殺した男子生徒の犯行と断定。被疑者死亡のまま・・・』

病室前で小声で話す吉田と畑野。

「数種類のドラッグを一辺に服用したと」

「ああ、どうやら常習してたようだ」

「今回の事件と何か関係してるんでしょうか？」

「分からん・・・ただ、あの学校が尋常ならぬ状態に置かれていることだけは確かだ」

病室から医師が出てくる。

「意識が戻りました。どうぞ」

中へと導かれる二人。目の前にはベッドの上、放心状態でボーッと天井の一点を見つめている篠山が横たわっている。歩み寄る吉田が質問する。

「どうしてドラッグなんか手を出したんだ？」

しばしの間の後、口を開く篠山。

「・・・ど・・・らぐ・・・」

「そうだ、飲んだろ」

深く息を吐き出し目を瞑る篠山が呟く。

「・・・やっぱり・・・」

「・・・まさか、知らなかったのか？」

意外な答えに眉をひそめる吉田。

「・・・なんと・・・なく・・・気付い・・・てたけど・・・」

とその時、畑野の携帯が震える。それを手に着信相手を吉田に見

せる。そこには「佐藤」の文字。軽く頷き「出る」の合図を送る吉田。

「もしもし……」

応答しながら病室を出ていく畑野。

さらに質問を続ける吉田。

「どうしてそんなものに手を出したんだ？」

ゆっくりと目を開く篠山の瞳から涙が零れ出す。

そして語り出す。

「……自殺した三人……やつらは……俺の仲間……だったんです」

ハツとする吉田。

「怖かった……みんな自殺してく……」

ボロボロと涙が流れて落ちる。

「昨日まで普通にしてたのに……一人、また一人……」

震えだす。

「残されたのは俺ひとり……不安だった……」

「だからクスリに頼ったのか？」

その質問に、初めて吉田に目を向ける篠山。

「貰ったんです……」「精神安定剤持ってるよ」って言われて……

・あいつらもいろいろあったから、医者に処方されたって」

興奮し始める。

「仕方なかったんだ、殺らなかったら殺られるから！！次はお前だつて！！」

「落ち着け！大丈夫だから！なっ落ち着いて、」

篠山の肩を押さえ込み落ち着かせようとする吉田。

「ハァ、ハァ、ハァ、」

目が泳ぐ篠原。

「君は警察に守られてる、大丈夫だ」

徐々に呼吸の乱れが収まる篠原。

そこに携帯片手に畑野が戻ってくる。

「例の発信元分かりましたよ」

吉田に耳打ちする畑野。その内容を聞いた吉田が呟く。

「双子の生徒から?・・・」

「今彼らの身元を洗ってます」

再び吉田の視線が篠原に向けられる。そして質問する。

「篠原君、「あいつら」って言ったよね?あいつらって誰なんだい?」

「・・・・・・」

視線を逸らし覚束ない口を動かし始める篠山、その名が告げられる。

懲

自宅ダイニングにて食事を摂る榎真と芹と祖母。
テレビからニュースが流れている。

『 98年に起きました女子大生殺人事件を受けて最高裁は無期懲役の判決を下しました。これを受けて弁護士側は・・・ 』

黙々と箸を口に運ぶ榎真。その横、テレビを観るわけでもなく俯く芹が呟く。

「裁判って時間かけすぎだよな」
箸の止まる祖母。

「・・・そうね」

「無期懲役ってなに？ 15年も模範囚続ければ出てこれるんでしょ？ 無期って意味ないよね」

「模範囚って、囚人の模範になってどうするの？ その前に犯した罪は？」

榎真も賛同する。さらに芹が続ける。

「だいたい裁判ってなんで被害者より加害者の方が国からの援助大きいのか、おかしいだろ」

「やられ損じゃない、一人殺したくらいじゃ死刑にならないしね」

二人のやり取りに黙り込む祖母、

「・・・うかばれないよ」

芹のとどめのセリフに完全に言葉を奪われる。

「・・・」

沈黙の食卓にキャスターは告げる。

『 弁護士側は連続殺人犯、少年Aの精神鑑定を要請しました 』

「少年法に守られてるってだけで死刑はないしね」
芹。

「何人殺したら死刑になるのかしら」
榎真。

+

和室、両親の仏壇に手を合わせる榎真と芹。

「……いよいよだね」

「……うん」

暈

深夜、人通りもなくなった街並みに路駐された車が並ぶ。

その内の一台、黒塗りのセダンの中、明かりの消えた一軒の家の様子を伺う男が二人、運転席に畑野、助手席に吉田。苛立つ心を鎮めるようにタバコに火をつけ啜える吉田。深く吸い込み溜め、気だるさにまぶたを落とす。ため息混じりに吐き出した煙、その曇った視界に瞳を開放する。そんな吉田の様子を見て畑野が声を掛ける。

「腹空きません？」

フツと鼻で笑う吉田。

「何か買ってきますよ」

シートベルトを外す畑野。

「リクエストあります？」

「肉まん」

「そりゃ難しいなあ」

二人微笑み合う。

「行ってきます」

車を出る畑野。

ひと気の消え去った街に、犬の遠吠えが響き渡る。

カップホルダーに置かれたコーヒーに手を伸ばそうと身を起こす吉田の瞳に、玄関から出てくる一人の少女の姿が映る。黒のワンピースに身を包んだ少女、門扉の前立ち止まり左右を確認して歩き出す。慌てて携帯を手にする吉田、履歴から畑野の番号を呼び出す。

「……動いたぞ」

少女が角を曲がった所で車から降りる。

「後を追う、また連絡入れる、とりあえずGPSで俺の後を追え」
電話を切り少女の後を追う。

人通りもない県道。

黙々と歩き続ける少女、その後ろを一定の距離を保ちついていく吉田。

少女の足取りは商店街へ。

コンビニの前。

立ち止まる少女、ポケットから携帯を取り出し話し始める。10秒とたたずに切る。そしてコンビニの中へと入っていく。

「・・・・・・・・」

携帯を手にする吉田。コンビニの外、車道を挟んだ対面で雑誌を立ち読みする少女の様子を伺ったまま畑野にかける。

「今コンビニに入った、今どこだ？・・・・・・そうか、遠くないな」何も買わずに出てくる少女、

「動き出した、切るぞ」

電話を切り後を追う吉田。

少女の足取りは商店街の裏路地へと入っていく。

細い裏通りを黙々と歩いていく少女、建物の影に身を隠しながらつけていく吉田。辺りは既に住宅街、碁盤の目のように細かく仕切られた細道をクネクネと、右に左に足早に歩いていく少女の後を、曲り角ごとに身を隠しついていく。

「・・・・・・・・」

あまりに細かく曲がり続け進んでいく少女、その足取りに疑問を覚え始めた次の瞬間、

「!?!」

その姿を見失う。焦り通りの真ん中に走り出て辺りを見回す。そこは線路沿いの道路。見回すも少女の姿は見当たらない。

「・・・・・・・・」

標的を失った足取りを感じ任せ進む。薄暗い街灯に視界を委ね、照らし出される住宅の狭間にその姿を探す。街を覆いつくす闇の静寂、その澄み切った空気の流れに研ぎ澄まされた感覚が刺激される。

「!」

虫の音に紛れ微かな足音を拾う。だがそれを遮るように目の前の遮断機の警笛が鳴り始める。その音に全てが掻き消される。苛立ちに眉をひそめ半ば諦め振り返った真後ろに

「!!」

少女が立っている。

耳障りなほど鳴り響く警笛が耳の中輪を描き、歪みシンクロした渦となり五感を支配する。ゆっくりと動き出す少女の姿がまるで遠退いていくような錯覚に襲われる。眩暈に似た感覚に足元がふらつきそうになった瞬間、真横を通り過ぎる少女の横顔に微かな笑みを捉える。

「!?!」

背筋に走る寒気、思わず振り返るも、淡々と歩いていってしまう少女、閉まりゆく遮断機の向こう側へと入っていく。二人の間を遮断機が遮る。電車の放つ光が近づく。なす術もなく立ち尽くし見つめる先、線路の向こう側、突如少女が立ち止まり振り返る。

「!?!」

上目使いで見つめてくる少女の口が、何かを語っているのを捉える。

「?!?!」

眉をひそめ見入る。一語一語、ゆっくりと繰り返す唇の動きをたどる。

「……な……ら?」

電車が近づく。

「「さよなら」って」

背後からの囁き声、聴き慣れぬ男の声に

「!?!?!」

ハッと振り返った瞬間、突き飛ばされる。

紙

7月25日

「メールですよ。出どころは二つ。生徒たちへ広めたのが北川榎真。双子の姉の方です」

「もう一つ、マスコミに流したのがその弟の芹です」

佐藤と木田が報告する。

朝霧に湿らされた遮断機が、高々と天を仰ぐ踏み切りの周りをパトカーが取り囲む。

「・・・・・・・・」

我を失い愕然とする畑野。その目の前にはブルーシートを被せられた肉の断片が転がる。

「・・・・俺がいながら・・・・・・・・」

呟く畑野。その背後から声を掛けてくる刑事、佐藤。

「お前のせいじゃねーよ」

「でも俺があの時離れなければこんなことには・・・・・・・・」

もう一人、畑野の肩に手を乗せ声を掛けてくる刑事、木田。

「事故とは考えにくいよな」

「・・・・事故のわけないですよ」

肩を震わせる畑野に木田が告げる。

「運転手の話だと向こう側に少女らしき人影があったように見えたりらしい。吉田警部のいたこちら側はこの壁で見えなかったと」

指差すそこは民家の塀。

「・・・・・・・・れたんだ」

「ん？」

「殺されたんですよ吉田さんは！！」

木田の手を振り払う畑野。

「な、なに言っただよお前、まだそんな、」

「吉田さんは北川兄弟を張ってたんだ！向こう側にいたのは間違いなく北川榎真なんだ！！」

線路の向こう側を指差す。

「俺さえ・・・俺さえ一緒にいれば・・・」

「おい畑野！どこ行くんだよ！！」
走り去る畑野。

+

6・02

榎真の部屋の中。

机の上の写真立てを手にする芹、その中の写真を取り出し制服の胸の内ポケットにしまう。

「行くよ」

榎真が声を掛ける。

「うん」

見送りに玄関先に出てくる祖母に背を向け靴を履く二人。

「今日は早いね」

「クラブの集まりがあるの」

「そう、頑張ってるね」

靴紐を結ぶ榎真が声を掛ける。

「・・・おばあちゃん」

「ん、なに？」

「・・・ありがと・・・」

ドアを開ける芹、榎真の手を取り出て行こうとする。

「榎真？」

思わず呼び止める祖母。振り返り微笑みかける榎真。

「なーに？」

「……………」

その屈託のない笑顔に何も言えなくなる。

「行ってきます」

「行ってきますーす」

「……………行ってらっしゃい」

静かにドアが閉まる。

ドアの外、うつむき涙する芹

「……………ごめんね……………ごめんおばあちゃん……………」

その手を取りしかりと握り合い二人歩き出す。

手を繋ぎ歩く二人の後ろを、一台のセダンがゆっくりと付いてい

く。その中、二人の後姿を憎悪に満ちた瞳で睨み付けるのは畑野。

ハンドルを握る手が震えている。

+

6..30

報道陣の車を取り囲む、その姿が日常化した北中学校正門前、朝練すら中止に追い込まれた校内からは、生徒たちのかけ声は消え、まだ誰一人として登校してくる生徒の姿はない。そこへ榎真と芹が手を繋ぎ歩いてくる。その姿を見つけ手を振ってくるキャスター橋田愛子。

「おーい！」

じっと見つめる二人、そのもとに歩み寄る。

「はいこれ、頼まれてたものよ」

ポケットから一枚の紙切れを取り出し二人に手渡そうとする橋田
「どうも」

受け取ろうと手を差し出す榎真に、それを天にかざし微笑み言う。

「交換条件でしょ」

ほくそ笑む榎真、素直に橋田に耳打ちする。あわよくば大スクー
プゲットのチャンス到来に瞳を輝かせ聞き入る橋田。

「・・・・・・・・・・」

だがその期待とは裏腹に、徐々にその表情は曇っていく。

「・・・・・・・・・・」

話を終え離れる榎真、愕然とする橋田の手から紙切れを掴み取り

「いい案だったでしょ」

微笑む榎真、その場を立ち去ろうとする二人を

「ま、待ってよ!」

呼び止める。背を向けたまま振り返りはしない二人にそのまま尋ね
る。

「本当なの?」

何も答えない二人。

「こんなことして何しようとしてるの?」

「・・・・・・・・じゃあね」

「頼んだよ・・・」

答えることなく門の中へと入って行ってしまう。

「何だって?」

茫然とその場に立ち尽くす橋田にカメラマン、かしざわ榎沢が声を掛ける。

粉

6..39

校舎内。

そっと戸を開け職員室を覗く榎真と芹。そこには既に3名の教員が出勤している。机に向かいそれぞれの作業に追われている。二人顔を見合わせ頷きその場を離れる。

給湯室。

その前、芹が見張りをしている。

中では電気ポットの蓋を開ける榎真、お湯の中に白い粉を入れる。

+

6..43

正門前。

路駐するマイクロバスの中、携帯片手に後部座席に腰を下ろしテレビ局と連絡を取っている橋田。その意気込んだ言葉が飛ぶ。

「ええ頼みます！生放送で一つ……任せて下さい、絶対いい画撮れますから、お願いします！！」

運転席に座る樫沢が声を掛ける。

「おい」

「それは私達が直接向かいますから」

無視して電話に向かう橋田の肩を揺さぶり強く呼び掛ける。

「おいって!」

「なによ! 今局に・・・」

手で電話を押さえ見上げた橋田、言葉が詰まる。そこには窓の外、警察手帳を見せ付けてくる畑野の姿が、中を覗き込み睨み付けている。

「詳しい話・・・聞かせてもらおうか」

+

9..10

校長室。

畑野が校長と教頭に向かい話をしている。

「あの二人の言動におかしな所はありませんでしたか?」

校長が口を開く。

「おかしいと言うか、あれ以来普通じゃありませんけどね」

「なにせ、事件が事件でしたから・・・」

教頭が口を濁す。

「刑事さんはもちろんご存知ですよ、二人の両親が少年Aに殺されたってことは」

「ええ」

即答する畑野。

ドアを叩く音とともに女教師がお茶を持って入ってくる。

「失礼します」

お茶を差し出す女。

「どうぞ」

「・・・どうも」

口にする畑野。

校長室を出る畑野。

「それではどんな些細なことでも何か分かりましたら連絡お願いします」

一礼しドアを閉め立ち去ろうとした目の前、女生徒が一人立ち尽くし見つめている。

「？」

廊下の真ん中、無表情のまま見つめてくる女生徒、その視線を気にしつつも、その横を通り過ぎようとすると

「刑事さん？」

突如尋ねてくる。

「！？」

ハッと彼女を見ると女生徒は続ける。

「屋上で待ってるって」

「えっ？」

「北川さんが」

「！？」

剥

9..39

階段を駆け上がる畑野、屋上のドアの見える下の階で立ち止まり腰を屈める。呼吸を整え銃を構える。屋上へと続く残りの階段を幾度となく後ろ振り返りながら近付く。

人影はない。

ゆっくりと上っていく。

素早く屋上へと繋がるドアの脇に身を隠す。汗に滲んだ手のひらをその指で拭いそつとドアノブに手を掛ける。息を呑み祈るように瞳を閉じる。気を入れ目を開けた瞬間、

「??」

立ち眩みのように目の前の景色が歪む。首を振り目を擦り勢いよくドアを開ける。

銃を構える畑野。

「!?!」

銃口を向けた視線の先、壁際に榎真が立っている。視界がぼやけ歪む畑野、意思に反した鼓動の高鳴りを覚え始める。微笑み掛ける榎真に銃を構える。感じたことのない重みが腕を震わせる。息が切れ始める。

「こんなところに呼び出して何のつもりだ」

不敵な笑みを浮かべただじっと見つめてくる榎真、その姿が幾重にも分裂して見える。

「ハア、ハア・・・」

激しさを増す呼吸の乱れ。朦朧とし始める意識。その姿をあざ笑うかのようにクスクスとせせら笑う榎真。

「な、何がおかしい!!」

「・・・だってほんとに来るんだもん」

「なっ!？」

挑発染みたセリフに我を取り戻す。

「ど、どうゆうつもりだ!!」

あくまで笑みを崩さない落ち着き払う榎真、

「分からないの？」

その口から解答の序章が示される。

「全てはひとつに繋がるのよ」

「どうゆうことだ?全部お前がやったのか?」

「そうよ、虐められてた金山の代わりにまず三人を自殺に見せかけ殺した。虐めてた主犯の篠山を残してね」

「なっ、」

「脅える篠山を葉漬けにしたのも私」

「.....」

「篠山には、三人を殺したのは金山だって言って恐怖を煽った」

「.....」

「クスリで我を失った篠山は私の言った通りに動いた」

「ハア、ハア、」

「自殺に見せかけて吊るさせたってわけ」

「ハア、ハア、」

「あとは倒れた篠山がここまで導いてくれた.....」

「いったい何のためにそんなことしたんだ!!」

息を切らせる畑野が叫ぶ。

「流れよ」

手のひら上に向け前に差し出す榎真。

「な、流れ?」

自分の手のひらを見続ける榎真。

「事件が起これば警察がやって来るでしょ。存在を知らしめるには
罠が必要だったの」

「なんでそんな.....吉田警部まで巻き込みやがって、目的は
何だ!!」

自分の叫びに再び意識が遠退く。片手で頭を抱えるその姿を見つめほくそ笑む榎真。

「テ、テレビ局まで……使って……ハアハア、いったい、何するつもりだ、」

手のひらを握る榎真。

「もっとひどいことが起こるわよ」

「ど、どうことだよ!!」

左胸に両手を当てそれを見つめる榎真

「ちゃんと狙って」

自らを標的へと導く。

「!？」

「……殺して……」

銃身が揺れる。

手の震えが激しさを増す。

「そうしないと……」

榎真の視線は彼の頭上へ

「!!」

ハッと振り返り見上げた頭上、出入口の上、鉄パイプを振りかざし飛び降りてくる芹。

+

「うう……」

目覚める畑野、頭部に走る激痛、滴り落ちる鮮血。

頭に伸ばそうとする手が上手く動かない。

背筋に掛かる自重。

右腕と右膝に絡みつく生温かい感触に違和感を覚える。

定まらない視線の先には、ただ広がる空。

仰け反る体、背中に走る硬く冷たい感触。

「なっ！」

そして自分の置かれた立場を理解する。

「お目覚めですか？」

その体は、屋上の塀の上に乗せられている。見下げたそこは遙か下の地面。

「な、なにしてんだお前ら、」

榎真が右ひざ、芹が右腕を掴み支えている。

「自由利かないでしょ」

ニッコリ微笑む榎真。

「お茶美味しかった？」

ニッコリ微笑む芹。

二人手を離し

「ひっ！！」

突き落とす。

残った力を振り絞り両手で必死にしがみつく畑野、行き場を探す足におさまる場所はなく宙ぶらになる。

「や、やめろ、やめてくれ！！」

「やめない」

しがみつく指を引き剥がそうとする芹。右手の指に手を掛ける。

「こ、こんなことしてなにになるってんだよ！！」

「ほんと、何になるのかしらね」

褪めた瞳で突き刺す榎真。

「な、なにいて」

「私達未成年者はね、国に保護されてるみたいなの」

「過剰なくらい手厚くね」

ゆつくりと小指を持ち上げる芹。

「ヒィィィィィー！！！！」

一気に離れる右手。

必死でその手を伸ばし再びしがみつく。

「いったい何人殺したらきちんと裁かれるのかしら」

「あなたで……5人目」
指で数える芹。

「少年Aは9人だっけ？」

「それでも死刑にならない」

「そんな奴ですら保護しようとするクソどももいる」

「や、やめろ、こんなことして亡くなった両親が悲しむぞ!!」
必死の訴え。

「死んだら悲しめないよ」

「悲しむのは残された者たちよ」

右手に芹、左手に榎真が手を掛ける。

「死んでみれば分かるよ」

「そしたら教えてね」

小指を掴む。

「た、たすけ」

持ち上げる。

「バイバイ」

奪

授業中の教室。

気怠げにあくびをする生徒たち。その中の一人、何の気なしに窓の外を眺めている。窓枠とゆう名のスクリーンに映し出されるその光景、虚ろなその瞳が捉えているのは、体育の授業でマラソンをさせられている生徒たちの姿。小さな粒が楕円に引かれた白線に沿い目的なき周回を重ねている。

「？」

粒々で構成された配列、突如粒の一つの停止によって配列が乱れる。立ち往生する粒たちがこちらを向いて指差し始める。

「??」

目を凝らし見つめる。瞬間、目の前を通過する黒い影に目を奪われる。

「!？」

鈍い衝撃音が鼓膜を刺激する。

粒たちの悲鳴がこだまする。

異様な空気、無意識に立ち上がり窓の下を見下げる。

「……鈴木？」

灰色のコンクリートが黒い液体で染め上げられていく。

「……先生……」

「どうした？」

転がる亡骸を指差す。

「……ひとが……」

手を繋ぎ正門を出て行く榎真と芹。
片手には榎真の温もり、もう一方には鈍い輝きを放つ黒く冷たい鉄の塊を握る。

10..24

駐在所内。

警官が二人、のんびりとお茶を飲んでいる。

「今度の休みどこか行くんですかー？」

「ゴルフよゴルフ」

「いいなあー、今度ご一緒させてくださいよー」

「いいけど高いよ、負けると」

「あっ、いつけないんだあー」

「誰だってやってんだろ、んなもん。バレなきゃいいんだよ」

「ハハハハハハ」

無線が入る。

『・・・・北中学校にてピストル強奪事件発生、直ちに・・・・』

「・・・・北中って言ってませんでした？」

「あー、聞き違いだろー」

ゴルフの素振りを始める。

「すいませーん」

そこに制服に身を包んだ男女がやってくる。

「はーい、どうしたのかな？」

「こんな物が落ちてたんですけどー」

銃口を向ける芹。

「!？」

躊

11…11

駅のホーム。

通勤ラッシュの去ったそこは、すでに人もまばらになっている。

電車がやって来る。

一番前の車両に乗り込む榎真と芹。

他人同士が触れ合わない程度に込み合っている車内、ドアに身をもたれかけ二人肩を寄せ俯いている。

11…19

ざわつく署内。

「下り電車に乗るのを見たとの目撃情報が入りました！」

「先回りしろ！」

13…13

車両が切り離され三両編成になる。

吊り革に掴まる乗客もいなくなった車内の中央、横一列に並んだシートの中の席に腰を下ろす榎真と芹。しっかりと手を繋ぎ、言葉もなくただ向かいの窓の外、流れる景色を見つめている。連なりを深め始める山並み、トンネルの中を通り抜け進む。

「非難全て終了とのことですよ。まもなく来ます」

ひと気のない駅のホーム。

「こんな・・・まだ子供じゃないですか、」

「本当にこの二人の犯行なんですか？」

「曖昧な目撃証言しか得られてはいない。だからこそ我々が呼ばれたんだろ」

「・・・ですね」

辺りは山に囲まれている。その景觀に似つかわしくない黒いジャケットに身を包んだ男が二人、ノーネクタイのスーツ姿の男が二人、計四人が写真を見つめ話している。彼ら以外の乗客はいない。

そこに電車がやって来る。

「いいか、合図を出すまで手は出すなよ」

「了解」

ジャケット組とスーツ組で別れる。

停車する。

ドアが開く。

一両目にジャケット組、二両目にスーツ組と別れて乗り込む。

榎真と芹の向かいの座席、斜め前に二手に別れて座ってくる。耳にイヤホンを付けたサラリーマン風の男達、チラッと目をやる榎真、そして瞳のみを二両目に動かし見つめる。二両目に乗り込んだ男達が横目で榎真と芹を見つめている。その一人が襟に仕込んだ小型マイクで指示を送る。

「・・・標的が行動を起こすまで待て」

俯いた男達、無言の返事が暗黙の了解を示す。

俯いたまま手を握り合い、会話すら交わさない榎真と芹。眠っているかのように揺れに身をまかせている。二人の左隣にはDSに熱中する少年が一人、右隣には居眠りをする老人が座っている。二人の座っている側の他の座席にはベビーカーの赤ちゃんをあやす女性

が一人、女子高生が三人座っている。向かい側には居眠りをする初老の女性が一人、学生とおぼしき男が二人で話をしている。

一駅通過。

14..45

二駅通過。

14..55

榎真の手が持ち上がる。

「!!」

男達の眼光が鋭く輝く。

榎真の手はうなじへ、寝ぼけているかのように掻き毟りその手は再び膝の上におさまる。

「.....」

「.....」

胸を撫で下ろした瞬間、持ち上がる芹の手、その手は胸の内ポケットへ。

「!!」

反射的に肩を動かしてしまう男達、俯いたままニヤける芹、その手には写真が握られている。

「.....」

つくことすら許されないため息、それを呑み込む男達を尻目に写真を見つめる二人。そこには二人と両親の笑顔が写っている。

山が開け海が見え始める。

DSをリックの中にしまう少年、そして腰を上げる。横目で少年を見つめる二人が呟く。

「……着いたね……」

「……降りよ……」

手にする写真を胸の内ポケットにしまう芹、その目の前を通過する少年、

「頭よ」

囁く榎真、

頷き立ち上がる芹、

ポケットから出されたその手に握られているのは拳銃、

「!!」

即座に立ち上がる眼前の男達、榎真と芹の前には少年が

「くっ!!」

一瞬の躊躇

「ガッ!!」

「オゴッッ!!」

浴びせられる容赦なき弾丸、

「キャアアアアアアー!!」

響き渡る悲鳴、

慌てて立ち上がる二両目の男達、その瞳の捉えたもの、それは榎真の向ける銃口。

幾重にも鳴り響く銃声、弾け飛ぶガラス片、飛び散る血しぶき、倒れ込む二人。

目の前に転がる二人の男の死体、

二両目に転がる二人の死体、

「アガアアアア……」

二両目、流れ弾に当たって悶える数人の乗客、

「いやあああゝ・・・」

目の前にしゃがみ込む少年に銃口を向ける芹、

「静かに」

騒ぎ立て二列目に逃げ惑う乗客たち、二人それを尻目に頭部の吹き飛んだ男の銃を手にする。

運転席のドアの鍵に銃口を向け放つ芹、ドアを蹴り開け運転手に銃口を向ける。

「止めて」

果

15..00

線路に降り立つ榎真と芹、柵を跨ぎ線路沿いの道路へと出る。

二人の瞳に一台のワゴン車が映る。騒音を撒き散らし猛スピードで近付いて来る。ローダウンにドレスアップされたフェンダーが、まるで地面を削るかのように向かって来る。その進路を塞ぐように道路の真ん中へ歩き出す榎真。急ブレーキ、白煙を上げるタイヤ、榎真の横をギリギリかすめるように止まる。

運手席、茶髪ロン毛の若者が窓から顔を出す。

「つぶねえだろこのガキ!!」

怒鳴りつける。

「轢き殺されてえ……っ?」

銃を構える榎真。

「ガッ……」

吹き飛ぶ頭、しなだれる体。

「ひっ!!」

助手席の金髪男が声にならない叫びを上げる。そのもとへ歩み寄り銃口を向ける榎真。

「運転できる?」

恐怖に顔を引きつらせる金髪男、背後より銃を向けられロン毛の亡骸をトランクに詰め込む。

15..15

沿岸を走るワゴン車。

ハンドルを握る金髪男、後部座席に座り銃口を向ける榎真と芹。

「携帯ちょうだい」

手を差し出す芹。

「えっ？」

「携帯電話だよ」

「あっ、ああはい、」

手渡された携帯を海に向かって投げ捨てる。

16・31

海を望む岸壁に囲まれた岬に立つ榎真と芹。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

言葉なくただ海を見つめる。

写真を手には芹が呟く。

「・・・・・・・・あんなに楽しかったのに・・・・・・・・」

「・・・・・・・・きれいに見えたのにね・・・・・・・・」

呟く榎真。

「・・・・・・・・」

谷底に向かって写真を投げ捨てる芹。ヒラヒラと舞い落ち、やがて視界から消える。

二人見つめ合い、そして抱き合う。

「・・・・・・・・行こう・・・・・・・・」

「・・・・・・・・果て・・・・・・・・」

駐車場。

車へと戻ってくる二人。芹がトランクを開ける。

「ただいま」

そこには口をタオルで塞がれ後ろ手に縛られた金髪男が

「んんゝ・・・」

死体とともに詰め込まれ悶えている。

16..53

車中。

ポケットに手を入れる榎真、一枚の紙切れを取り出し金髪男に手渡す。

「ここに」

そこには一つの住所が書き記されている。

四

18..07

閑静な住宅街。

マイクロバスが路駐している。その中、助手席に瞳を輝かせる橋田が外を見つめている。

「本当に来るんすかねー」

ダッシュボードに足を乗せ運転席に深々と座る樫沢がため息混じりに尋ねる。

「警察が捜査してるのよ、あの子達の周辺で何かが起きてることだけは間違いないわ・・・絶対に来る」

「でも言わなくて良かったんすかー？このこと」

「言ったら約束破ることになっちゃうじゃない。それに生放送の意味だってなくなっちゃうでしょ」

「けどあっちは今頃警官だらけっすよ」

「・・・何か考えがあるのよ・・・あっ携帯鳴ってるわよ」

「おっとー・・・はいもしもーし」

車内のテレビがついている。

「えっ、マジっすか！？・・・はい・・・はい・・・」

ニュース特番に切り替わる。

『本日15時頃、東海道線にて起こりました発砲事件ですが警察官4名が死亡・・・』

電話を切る樫沢。

「おい、」

『一般人10名に怪我人が出ており、その内4名が重体となっております・・・』

ニュースを見入る橋田に声を掛ける樫沢。

「おいって!」

肩に手を掛け無理やり振り向かせる。

「何よ!？」

「畑野警部……死んだってよ」

「えっ??」

『……所持していた拳銃がなくなっていることから、同市内で起きた派出所内で』

顔を見合わせ息を呑む息を呑む。

『警官二人が射殺され拳銃を奪われた事件との関連性を……』

突如その耳に届く排気音、

「……」

「……」

近付いて来る音、慌てて覗いた窓の外、一台のワゴン車が向かい側に止まる。

「!!」

ドアが開く。

降り立つ榎真と芹。

二人をその場に残し車は走り去る。

「……」

「……」

身を屈め息を殺し様子を見つめる橋田と榎沢。

目の前の民家を見上げる榎真と芹、表札を確認し迷いなく塀に埋め込まれたチャイムを押す。返事を確認することもなく塀を乗り越え敷地内へと入っていく。無防備に玄関のドアが開く。そのまま押し入る二人、ドアが閉まる。

「……」

「……」

呆氣に取られる橋田と榎沢、ハッと顔を見合わせ互い軽く頷く。カメラ、マイクを手にし、忙しなく外へと飛び出す。

恐る恐るドアノブに手を掛ける橋田、その様子をカメラに収める
樫沢。音を出さないようにドアを開ける。息を殺し、二人中へと足
を運ぶ。

静寂に包まれた廊下、辺りを見回すように様子を捉えるカメラ。

閉められたリビングのドアの前、息を呑み込む橋田

「・・・・・・・・」

そのノブに手を掛ける。カメラを見つめ軽く頷き合図し、そっとド
アを開ける。

「ひっ!!」

発した言葉に口を押さえる橋田。その足元に転がるのは、表面に
小さな穴が四つ空けられた真っ白なクッション。

「いらっしやい」

ドアの脇、銃口を向け微笑み掛ける榎真と芹。

侵

19..50

テレビ局前。

辺り一面をパトカーと警官の群れが取り囲みバリケードを築いている。

+

社長室。

社長と役員の一人が話をしている。

「本当に来るんだろうな？」

「さあ・・・」

「なんだその返事は！！」

「・・・」

「少年Aに殺された双子の兄弟が出演するとゆうから、わざわざ無理言って大西さんに来てもらったんだぞ！！」

「・・・お言葉を返すようですが、殺人鬼とは言え14歳の子供、この厳戒態勢を潜って入ってこられるとはとても思えません・・・」

「まーだ殺人鬼と決まったわけではなかろう。証拠は挙がってないんだ。彼等が出演を望んだ、もしかしたら濡れ衣を晴らしたいのかもしれない！その希望に我々が応える、素晴らしいことではないか！」

「……そうだとゆう保障もない……だいいち危なくて放送できませんよ」

「危ないかあ？どこが？？」

「相手はピストルを持ってるかもしれないんですよ」

「2対幾つだ？」

「……」

「捕まえたければ捕まえればいいさ……」

窓の外、局を取り囲むバリケードを見つめる。

「世紀の大スクープだぞ……」

ほくそ笑む。

「どう転ぼうともいい画が撮れるってやつだ……」

19..54

バリケード前。

局の名を背負ったマイクロバスがやって来る。

検問に当たる警官が誘導灯を掲げそれを止める。

窓を開け挨拶するのは慥沢。

「ご苦労さまでーす」

許可証を見せる。

中へと誘導される。

19..55

地下駐車場。

マイクロバスから降り立つ榎真と芹。

橋田に銃口を向ける芹、榎沢に告げる。

「裏切ったらこの女殺すから」

懇願の表情で顔を引き攣らせる橋田。同様の表情で頷く榎沢。腕時計に目を向ける。局内へと全力で走り去る。

汗ばむその手には握られているのはビデオテープ。

19..57

サブコントロールルーム。

息を切らし駆け込んでくる榎沢。

「な、なんだお前、本番前だぞ」

押し返そうとするディレクター。

「それどころじゃねーんだよ!」

怒鳴り跳ね除ける榎沢。

19..59

局内通路。

橋田に銃を突き付け黙々と進んで行く榎真と芹。

「!？」

「キャッ!」

行き交う社員達が皆避け道を開けていく。

「こっちです」

誘導する橋田の言う通りに進んで行く二人。

「！！」

その姿を見つけ、曲り角に身を隠す男が一人、私服姿の警官。その手には無線が握られている。

「標的の侵入を確認、人質が一名、第3スタジオ方面へ進行中」

橋田にスタジオのドアを開けさせる。

償

20..00

第3スタジオ。

一斉にカメラが向けられる。

生放送される榎真と芹、そして銃を突き付けられている橋田の姿。「みなさんご覧戴いておりますでしょうか、大変なことになりました！全国指名手配中の双子の兄弟がスタジ・・・」

銃を天井に向け発砲する榎真。

「ひっ！！！」

「キャアアアー！！！」

さらに二発、三発と打ち上げ

「黙れよ」

呟く芹。

静まり返るスタジオ内。

「くだらない前置きはいらさない」

硝煙の匂い立ち込めるそのスタジオは、討論番組の生放送。

反射的に立ち上がり逃げ腰になったままその場に座り込むゲスト達。それを尻目に、橋田に銃口を押し付けたまま司会者の立つステージへと歩み寄る二人。

「どけ」

司会者に銃を向け退かし占拠する。背後には大きなスクリーンが設置されている。

「あ、あなた達の目的は・・・いったい何なんですか？」
声の震えた司会者の男が尋ねる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人顔を見合わせ軽く頷く。
榎真が口を開く。

「私たちの両親は連続殺人犯の少年Aによって殺された」

皆一様にハツとする。

全ての視線が二人に集まる。

「何の罪もないお母さんとお父さんは私たちの・・・目の前で・・・」

「

言葉に詰まる榎真。

「9人も殺しておいて死刑にならないなんておかしいだろ！」

即座に代弁する芹。

「今回の事件・・・本当にあなた達がやったの？」

ゲスト評論家の大西、一步身を乗り出し発言する。

「そうだよ」

即答する芹。

「まさかそんなこと訴えるためにあんなに大勢の人たちを・・・」

興奮する大西、

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

それを褪めた眼差しで見つめる二人。

そして互い顔を見合わせ

「あなた達がしたことも少年Aのやったことと変わらないじゃない

！」

ほくそ笑み告げる。

「同じなんかじゃないわ」

「それ以上だ」

息を呑むゲストにスタッフ。

二人の放ったセリフに、誰もが自分の立場に恐怖を覚える。

スタジオ内を包み込む静寂、その中、一人怯むことなくそれを打

開する大西。

「こんなこととして天国の両親が喜ぶと思ってるの!？」

強気な訴えに、無言のまま見つめる二人にさらに続ける。

「……悲しんでるわよ」

静かに視線を落とす二人。それを見て取り一転、優しく語り掛ける。

「……でもね、悪いのはあなた達じゃない」

20..04

北中学校職員室内。

教員達が集まり食い入るようにテレビを見つめている。

『悪いのは歪んだ社会のせい……あなた達のせいじゃないわ・
・・・』

20..04

新宿アルタのスクリーン前。

スクリーンに映し出される大西の後姿、その先に俯く榎真と芹。
アルタ前をただ過ぎ去って行こうとする人々の流れを、立ち止ま
り見入る人々の群れが堰き止める。

20..05

渋谷109スクリーン前。

映し出される大西、笑みを浮かべ訴え掛ける姿に、信号待ちで立ち止まり見入る若者達の目が釘付けになる。

「撃っちゃえよ！」

「死刑だ死刑！」

「殺れ殺れ！」

車のクラクションが鳴り響く。

20..05

局裏口内。

「狙撃班前へ！」

「準備よし！」

局内へ機動隊突入開始。

20..05

「……ただ寂しかったただけなのよね？」

語り掛けられ銃を降ろす二人。

ゆっくと二人に近付いて行く大西、

「……じゃあ」

榎真の言葉に足を止める。微笑を称え

「なーに？」

軽やかに尋ねる。

「……ゆるして……もらえるんですか？」

力なく尋ねる榎真。

そのセリフに両腕を広げ、さらに歩み寄っていく大西。

「もちろんよ。あなた達は国に法律で守られてるの。罪を償っていくらでもやり直しができるようにってね」

トリガーに掛ける指に力が入る榎真。

それを見て取り息を呑む大西。

「……それじゃ残された者たちの悲しみや怒りはどうなるんですか？」

俯いたまま睨み付ける榎真。

「あなた達が生きて償っていくのよ」

額に汗の滲む大西。

「僕たちが生きてること自体が遺族の憎しみや怒りを生んでるんじゃないの？」

褪めた瞳で突き刺す芹。

「少なくとも私たちはそう思ってる」

褪めた言葉を吐き捨てる榎真。

「そんな風に思っちゃ駄目よ！憎しみや怒りからは何も生まれないのよ！」

20..07

秋葉原 家電量販店テレビコーナー前。

同じチャンネルになっている全てのテレビ。

その前、食い入るように見つめる人ばかり。

『これからをどう生きるかを考えなきゃ
』

大西の熱弁がサラウンドで響き渡る。

「やらせ？」

「なの？」

「さあ」

20..07

額から流れ落ちる汗を拭うこともせず、あくまで微笑み掛ける大西。

「そんなの他人事だから言えるのよ」

「偽善だね」

睨み付ける二人。

「そんなことないわ！」

断言する大西。

冷ややかに見つめる榎真が尋ねる。

「じゃあもし自分が同じ目に合ってもそう言い切れる？」

一瞬の躊躇。

慌てて返す。

「も、もちろん」

腕を上げパチンと指を鳴らす芹。

20..08

サブコントロールルーム。

腕を上げ指を鳴らす芹、

その合図を見て取りビデオの再生スイッチを押す樫沢。

20..08

「よかった」

呟く榎真、芹と顔を見合わせほくそ笑む。

その背後のモニターに映像が映し出される。

ざわつくスタジオ内。

怪訝な面持ちで画像を見つめる大西。

「!？」

すぐさま悟り二人に目を向ける。

不敵な笑みで返す二人。

映し出されているのは大西家の全景。

「.....」

モニターを凝視する大西、その瞳に映るのは、穴の開いた血だらけのクッション。

「!!」

頭部を打ち抜かれ転がる大西の家族の姿。

愕然と膝を落とす大西、

褪めた瞳で見下す榎真、芹。

20..10

「目障りだから連れてって」

榎真の言葉に、スタッフが駆け寄る。

「人殺しイイイイイイイイー!!」

肩を担がれ連れて行かれる大西、

「殺してやるウウウウー!!!」

悶え叫ぶ。

「.....」

「.....」

引き摺られ連れ出される。

その姿を哀れみの瞳で見つめ

「偽善者が」

呟く芹

「口先だけなら何とでも言えるわよ」

吐き捨てる榎真。

「人権人権人権」

芹

「人権人権人権人権人権.....」

芹

「人権っていったい何だよ!!」

芹

「なんで未成年だったら赦されるんだ!!!」

芹

「殺した方の人権ばかり優先されて殺された方は無視!?!」

榎真

「なにそれ!?!」

榎真

「ばっかじゃないの!!!」

榎真

「未成年なら何しても償えるってのか!?!」

「そんなのおかしいでしょ!!」

静まり返るスタジオ。

「……………」

唇を噛み締める芹

「……………うつ……………うつ……………」

涙ぐむ榎真。

言葉をなくした二人に、恐る恐る声を掛ける司会者。

「あなた達、まさか自分達も刑務所に入って少年Aに復讐しようなんて思ってるんじゃない?」

寂しげにはにかむ二人。

「そんな馬鹿なことはことは考えてません」

「それに無理だ……顔すら合わせてもらえないでしょ」

「犯した罪は自分達で償います」

「それじゃ自首なさるんで……す……!?!」

背を押され突き飛ばされる橋田、ゆらっと前のめりに押し出され解放される。

「!?!」

「突撃!!」イヤホンへ告げられる合図

盾を突き付け突進する機動隊

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

カメラに向かい頭を下げる榎真、芹

銃口を互いの額へ

見つめ合い微笑み

「またね」

芹

「……………」

頷く榎真

20..13

新宿アルタスクリーンに映し出される機動隊員達の後姿、スクリーン前、群れと化した人々が息を呑み見入る

十

渋谷109スクリーン。

画面が切り替わる。

見入る人々のざわめきが波となり揺れる。

『しばらくお待ちください』

軀

7月25日

『 今国会で少年法改定案の決議が決定しました 』

日常は終わることなく続く。

『 … 核実験を実施したとの報告を受け日本政府は遺憾の意を表明、経済制裁を含めた… 』

改札から押し出されるように溢れ出てくる人々の群れは決して流れを止めることはない。忙しなく行き交う人々の表情は誰しも明るくはない。それぞれが心に秘めた憂鬱を隠して歩いている。

背広に身を包んだ気怠い面持ちのサラリーマン達

制服に身を包んだ身の丈に合わない化粧で虚勢を張る女子高生達

「… … みんな… … 」

ブツブツと独り言を呟くランドセルを背負った小学生

「… … んじゃえばいいんだ… … 」

深い悩みなど何もなさそうな大学生達

「んなのやっちゃえばいいじゃんよ」

「ヒヤハハハハハ」

その誰もが心に狂気を笑顔の衣に隠し歩く。

気に入らない他人を、心の中あらゆる手段で幾度となく殺し、今にも破れてしまいそうな薄い衣が剥がれてしまわぬよう歯を食い縛り耐えながら進む。

警笛が鳴り響く。

踏み切りの前、いつせいに行進を止める群れ。

その群れを掻き分け進む女性が一人、

「・・・・私は悪くない・・・・」

眉をひそめる彼女の瞳に映るのは、目の前の自転車に乗った男性

「・・・・私は間違っていない・・・・」

バッグから取り出したもの、

それは包丁

「・・・・間違っている・・・・ない・・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0801h/>

Paradise † End

2010年10月9日14時27分発行